

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 匹田剛



学位申請者 恩田義徳

論文名 古代教会スラブ語の分詞について 福音書テキストを対象に

結論

恩田義徳氏から提出された学位請求論文「古代教会スラブ語の分詞について 福音書テキストを対象に」について論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に全員一致で達した。

審査委員会は学内より川口裕司教授、風間伸次郎教授と匹田、学外より中澤英彦本学名誉教授、岩井憲幸明治大学教授の5名で構成され、匹田が主査を務めた。

論文の概要

本論文は、古代教会スラブ語(OCS)の分詞の用法や通時的な変化に関して、主要な写本のテキストに観察される「誤用」を手がかりに、時に言語学的に、時に文献学的な発想で考察することを目的とした論文である。

本研究は第0章「序論」で研究対象を明らかにした後、それに続く最初の数章を利用してOCS研究の際に前提として把握しておくべき情報の整理・紹介を行っている。

第1章「スラブ諸語」ではOCSの印欧語族やスラブ語派における比較言語学上の位置、歴史的分化の経緯、現代スラブ諸語の概要をまとめている。

第2章「OCSの歴史的・文化的背景」では、OCS成立の歴史的・文化的な背景をまとめ、その中ではOCS成立の契機となったスラブ人への東方正教会による布教の歴史についても詳述されている。

第3章「OCSの概略」では、2章と異なり言語としてのOCSそのものに焦点をあて、文字や音声・音韻面について紹介され、OCSの資料についても紹介がなされている。

第4章も本研究の狭い意味での本論に入らないことでは上記の各章と同様であるが、それらとは若干性質を異にする章である。本研究では資料体としてヘルシンキ・キリル・メトディオス・コーパス(CCMH)を利用しているが、まず本章でその概要が述べられている。ただし、本章で述べられているように残念ながらCCMHはいくつかの問題を抱えており、そのまま本研究の利用に供することは難しい。本研究の前段階として、恩田氏はCCMHの

データを利用してマリア写本、ゾグラフォス写本、アッセマーニ写本、サバの本の福音書テキストの平行コーパスを作成した。その際、利便性の向上のための文字の置き換え、福音書の並べ換え、テキストの体裁の改編、可能な限りの誤植の訂正などを行っている。この仕事に対して恩田氏は本研究の「副産物」とあくまでも控えめに言及しているが、当該分野における今後の研究に於いて非常に貴重なツールであり、この平行テキストの作成自体が恩田氏による一つの業績として大きな価値を持つものである。なお、本平行テキストを A4 サイズの用紙に印刷したものは全 477 ページに及び、本論文の巻末に付録として全体が掲載されている。

第 5 章「OCS の分詞の規範的用法」で、恩田氏は OCS の分詞の用法や文法カテゴリーを形容詞のそれと比較しながら詳細に概説していく。その中で、まず分詞には大きく分けて以下の用法があることが述べられている：

- a)形容詞と同じように名詞を修飾する「定語的用法」
- b)述語動詞が表す動作に付随する動作を表す「述語的用法」
- c)以下に示す特定の動詞の補語として使用される「補語的用法」
 - 1.byti の補語
 - 2.知覚動詞の補語
 - 3.特定の動詞の補語
- d)名詞として分詞を用いる「名詞的用法」
- e)時や原因などの状況を表す「独立与格」

それに加えて、形容詞の短語尾形と長語尾形の区別にも言及し、前者は述語としても定語としても用いられるが、後者は定語としてのみ用いられることに触れた上で、定語として用いる短語尾形は当該の形容詞と名詞の組み合わせが初出の場合で、長語尾形の場合はその組み合わせが既知のものである場合とする定説を確認している。

恩田氏はそれに続けて分詞の短語尾と長語尾の用法についてさらに検討している。前述の大きく分けて 5 つある用法の内、曖昧さが排除でき、明確に他の用法と区別がつく用法について恩田氏自身が作成し第 4 章で紹介された平行テキストを用いて調査を行った結果、それらの用法ではもっぱら短語尾形が用いられていることを明らかにしている。これらの用法はいずれも一致する名詞・代名詞と主語と述語の関係をなすものばかりであることから、「分詞は名詞との関係において主語(主体)－述語(動作)の関係をとるとき短語尾形となる」という仮説を立てる。ちなみにこの仮説は、前述の分詞の用法 b)「述語的用法」の分詞が短語尾形として現れることを述べている先行研究の言説とも繋がることになる。

この仮説を確認するために、恩田氏は平行テキストにおいて時に述語動詞と分詞が置き換わる現象に着目する。氏が平行テキスト全体を精査した結果、述語動詞と置き換わる分詞は全て短語尾形であった。この事実によっても、分詞の短語尾形が述語に近い

機能を果たしていることが見て取れる。また、述語的用法の分詞が短語尾形と関係することは現代ロシア語の副動詞の形態と比較しても見て取れる事実である。

第6章「OCSの分詞の「誤用」と使用者の規範意識」では、前章で論じたOCSの述語的な分詞の通時的な変化に関連した議論を進める。述語的に用いられ、述語動詞によって示される動作に伴う副次的動作を表す分詞には、本来述語動詞と分詞を結ぶ接続詞は以下のa)のように不要のはずであるが、時に接続詞によって両者を結びつけたb)のような例があることは既に先行研究によっても報告されている。

a) Part + Verb

b) Part + Conj + Verb

本章では、この様に分詞が接続詞を伴って現れる現象をロシア語史における分詞の変化の端緒としてとらえ、それがどのような要因によって引き起こされるかを検討する。恩田氏は言語の変化の要因としてアンリ・フレイ(Henri Frei)の主張に従い同化、分化、簡潔、不変異、表現性の欲求により生じた誤用によるものがあるとし、それに加えて言語の状態を保とうとする動き、即ち規範に向かおうとする写本制作者の意識から生じるものもあると考え、それを議論の出発点としている。その上で分詞と述語動詞を接続詞によってつなぐ構造が生じた原因を以下の様な仮説によって説明しようと試みる：

仮説1：意味的に類似する構造を混同した。

仮説2：元のテキストに忠実であろうとする規範意識がはたらいた。

これらを確認すべく、自作の平行テキストを用い精査したところ、恩田氏は以下の事実を得る：

a)現在分詞と過去分詞の両方で問題の構造を取りうる。しかし過去分詞の方が用例数は多い。

b)語順は分詞が先行し、述語動詞が後続する場合に限られる。

c)単独の文献にあらわれる場合と複数の文献に共通してあらわれる場合がある。

動作の順次性をあらわしやうい過去分詞の例が多数を占めていること、全ての例で分詞が動詞に先行する語順であること、「述語動詞1 + 接続詞 + 述語動詞2」の構造が語順を変更すると動作の順番が変わってしまうこと、の各点から恩田氏は、これらの「誤用」が見られる際の分詞はいずれも述語的用法のものであり、「述語動詞1 + 接続詞 + 述語動詞2」と「分詞 + 動詞」の構造の意味的な類似性が混同を生じさせた結果この様な「誤用」が生じているとする。

また恩田氏は続いて、当該の構造が単独の文献にあらわれたり複数の文献に共通してあらわれることに関連して、これらが翻訳元となったギリシャ語のテキストによる影響により等しく生じたのではないことを確認する。その結果、「分詞 + 接続詞 + 述語動詞」の構造はギリシャ語のテキストでは少数しか見られず、この「誤用」はギリシャ語から直接的に受

け継がれたものではなく、OCS への翻訳時あるいはのちの筆写時のいずれかの段階で意味的類似性による混同とオリジナルへの規範意識によって生じた構造であることを確認している。

審査の概要及び評価

本論文は、OCS の分詞の用法や通時的な変化に関して、写本に観察される「誤用」を手がかりに時に言語学的に、時に文献学的な発想で考察・分析した論文であり、自ら作成した電子パラレルテキストを利用して、OCS の分詞について新たな説明を試みたものである。OCS はスラブ語の研究において非常に重要な意味を持っているにも関わらず現在日本においてそれに取り組もうとする若手研究者がなかなか育たない状況下で、恩田氏が OCS の研究に取り組んでいること、そのこと自体に大きな意味があると言っても良い。また、OCS の分詞は非常に多くの問題を含んでおり、しばしば敬遠されがちとも言えるテーマでもある。データの粘り強い収集・整理という膨大な物理的作業と、知的で緻密な作業が両立している本研究は審査委員会において高く評価された。

審査委員から本研究において高く評価できる点として具体的に指摘された主なものは以下の通りである：

- (1)OCS 研究は全てし尽くされているという意見もあるが、本研究は OCS 研究にまだまだすべきことが残されていることを証明してくれた。
- (2)5 章と 6 章を中心に展開される以下の 2 つの発見は、OCS の文法、とりわけ分詞に関する議論は当該分野での貴重な成果と考えられる：
 - (a)分詞の述語的用法と短語尾形を結びつけた。
 - (b)分詞が接続詞を伴うという奇妙な現象が何故起こるのかを確かめた。また、これら「誤用」を鍵に言葉のあり方を洞察する論理の展開は、狭義の言語学とは異なる文献学的方法として非常に興味深い。
- (3)4 章で紹介されている自作のパラレルテキストの作成は高く評価されてしかるべきものである。5 章・6 章での研究はいずれもこのパラレルテキストがなければ成立しなかったものである。何年もの時間をかけて膨大なデータと格闘し、元となるコーパスにあった問題点をこつこつと改善して作り上げたこのパラレルテキストはその作業だけでも評価されるべきものである。
- (4)このデータを利用することで本研究で新しい知見に到達することが出来たことはこのパラレルテキストの有用性を証明するものであり、間違いなくこのデータは後進にとって利用できる有益なものであることがわかる。本人は「副産物」と非常に控えめに評価しているが、このパラレルテキストの持つ意味は大きい
- (5)現代語の研究の立場から見るとサンプルとして収集した例が少ないようにも見えるが、

これはOCSという非常に限られた資料しかない言語であることを考えると決して少ないものではない。むしろ、これだけの量のものを収集したことが評価できる。

以上が本研究において高く評価できるとして指摘された点であるが、その一方で審査委員から本研究の改善されるべき点として以下の様な指摘があった：

- (1)形式的な不備・不統一・誤りが散見された。とくに引用元に関する情報は重要なので注意して欲しい。
- (2)本研究中にしばしば見られる「規範」という概念が不明確である。
- (3)本研究で文法の問題として扱っている現象はスタイルの問題と考えることは出来ないか？今後検討が必要である。
- (4)まず最初にデータの全体を数量的な面も含めて紹介し、それに基づいて議論を展開させる方がより理解しやすくなったのではないか。
- (5)本研究のメインとなる5章・6章にもっと重心を置いた構成にすべきである。それ以外、とくに1～3章、7章などは、当該分野に明るくない読者への配慮という意味はあるのであろうが、もっと簡単に済ませてしまい、その分本来のテーマをより具体的・詳細に論じた方が良い。つまり、5章・6章の議論をもっと深く、広く展開して欲しかった。例えば、通言語的な観点、通時的な観点、ロシア語などの現代の言語における形動詞、副動詞との比較・対象、アスペクトとの関係など、様々な視点からこの問題に当たって欲しかった。

各委員から形式的側面と今後の課題を中心に以上の様な要望や意見が出されたが、これらは前述のように本研究の価値を高く評価した上でのものであり、多くは今後の発展を期待する建設的な提言である。

また、最終試験における質疑において、恩田氏の応答は的確であり、批判的なコメントについても多くは既に自覚しており、悩んだ結果であることも多くの場合見て取れた。また、慎重さ故に論文中では明記されていなかったものの、今後の研究の方向性や発展の可能性についても具体的なビジョンを持っており、さらに本研究を発展させて行く強い意思も感じられた。

以上本審査委員会は、論文の内容及び最終試験での質疑応答に基づき総合的に検討した結果、恩田義徳氏の学位請求論文「古代教会スラブ語の分詞について福音書テキストを対象に」が博士(学術)の学位を授与するにふさわしいと全員一致で判断した。